

今週の為替相場見通し(2024年4月22日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		152.93 ~ 154.79	154.63	152.50 ~ 156.00
ユーロ	(ドル)		1.0601 ~ 1.0690	1.0657	1.0550 ~ 1.0700
(1ユーロ=)	(円)		162.75 ~ 165.02	164.81	161.00 ~ 168.00
英ポンド	(ドル)		1.2367 ~ 1.2498	1.2370	1.2300 ~ 1.2700
(1英ポンド=)	(円)	*	190.31 ~ 192.84	191.28	189.00 ~ 194.00
豪ドル	(ドル)		0.6363 ~ 0.6493	0.6419	0.6370 ~ 0.6520
(1豪ドル=)	(円)	*	97.78 ~ 100.02	99.25	98.90 ~ 100.40

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替デリバティブチーム 大野 梨紗

(1)今週の予想レンジ: 152.50 ~ 156.00 円

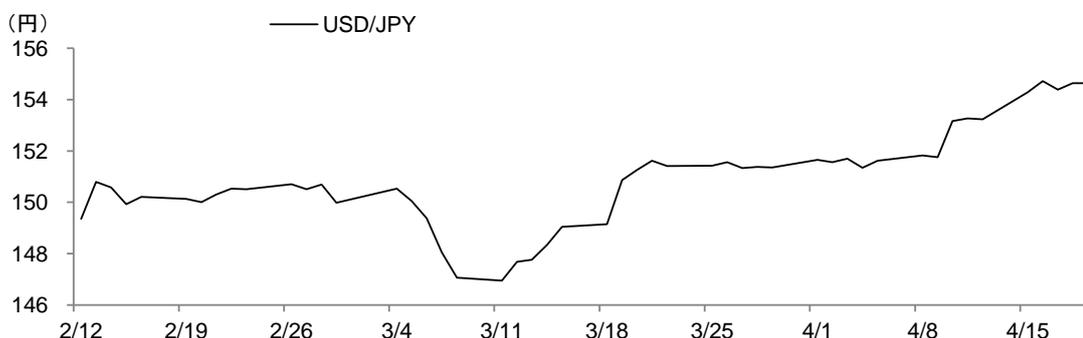
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は堅調に推移。週初15日、153.30円でオープンしたドル/円は、米金利上昇を受け154円を目指す展開。海外時間は、米3月小売売上高の強い結果を受けて更に米金利が上昇し、154円台半ばに上値を伸ばした。16日、ドル/円は154円台前半でもみ合い後、海外時間は複数のFRB高官によるタカ派発言を受け米金利が続伸し、34年ぶりの高値となる154.79円を付け、高値水準で引けた。17日、ドル/円は政府・日銀による円買い介入警戒感が煽る中、154円台後半で小動き。海外時間は日米韓財務相会合後の声明で、円安およびウォン安に対する深刻な懸念を共有したことが伝わると一層介入警戒感が高まり、154円台前半に下落。18日、ドル/円は米金利低下や神田財務官による円安けん制発言を受け、一時154円を割り込むも、海外時間でのFRB高官によるタカ派発言や米金利の反転上昇につられ、154円台後半まで値を戻した。19日、ドル/円は下に往って来い。中東における地政学リスクの高まりから一時153円台半ばまで下落したが、売り一巡後は154円台を回復。海外時間には、FRB高官によるタカ派発言を受け、154.60円付近まで上昇し、同水準で越週した。

今週のドル/円は引き続き堅調な推移を予想。米国の雇用やインフレ関連指標の予想を上回る結果が相次ぐ中、先週はパウエルFRB議長を含む複数のFRB高官による発言機会があり、その内容の多くは「利下げを急がない」姿勢を明確にするものであった。これにより米国の利下げ実施時期予測は後退、年内実施回数も3回から2回以下へ減少するとの見方がますます優勢となった。さらに、初開催された日米韓財務相会合が注目を集めたが、鈴木財務相は一定の成果を強調しつつも、「為替はG20の議題でなかった」とも発言しており、結果的に政府・日銀は、インフレ抑制を推し進めるためドル高を容認する米国に配慮せざるを得ず、ドル売り円買い介入に踏み見込めない状況が解消された訳ではないものとする。この両国における状況下、日米金利差が意識されることでドル/円はもう一段、上値を切り上げる展開を予想する。今週は米国で23日(火)米3月新築住宅販売件数、25日(木)米1~3月期GDP(速報)、26日(金)米3月個人消費支出(PCE)デフレーターが発表が予定されている。本邦では25日(木)~26日(金)に日銀金融政策決定会合が予定されており、展望レポートや会合後の植田日銀総裁会見に注目が集まる。

(3)先週までの相場の推移

先週(4/15~4/19)の値動き: 安値 152.93 円 高値 154.79 円 終値 154.63 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

(1) 今週の予想レンジ: 1.0550 ~ 1.0700 161.00 ~ 168.00 円

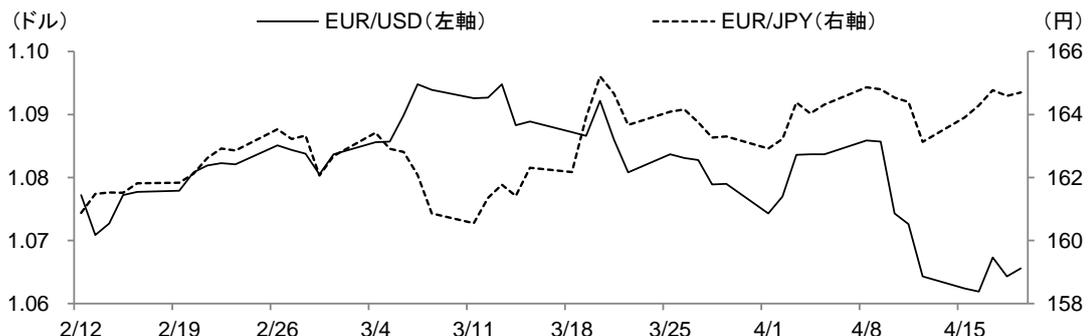
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロは1.06台半ばを中心に方向感に乏しい展開となった。週初15日は、米3月小売売上が市場予想を上回る堅調な結果になったことに加えて、中東リスクが意識される中、ドルが買われる展開となった。翌16日は米金利が上昇したことなどから一段とユーロは売られ、一時1.06ちょうど付近まで下落する場面が見られた。しかし、独4月ZEW景気期待指数が市場予想を上回る結果になると買い戻しが入り1.06台後半まで上昇する場面が見られたが、米金利が一段と上昇する中では、ユーロ買いは長くは続かず、その後は1.06台前半まで値を戻した。17日は米金利低下や欧州株高の動きを背景にユーロが買われる展開。ナゲル・独連銀総裁が「6月利下げの可能性は高まった」との認識を示すと一時反落する場面があったものの、その後、すぐに切り返し、1.06台後半まで再び上昇。18日は序盤では底堅く推移したが、ウィリアムズ・ニューヨーク連銀総裁のタカ派発言を受け、米金利が上昇幅を拡大させる動きとなると、1.06台半ばまで下落。19日はイスラエルがイランを攻撃したとの報道をきっかけにドルが買われる値動きとなり、1.06台前半まで下落したものの、その後は、中東に関する報道が錯綜する中、値を戻す展開となり、結局1.06台半ばで週末を迎えた。

今週はユーロ/ドルが軟調な推移になると予想。相場の材料としては引き続き、米国とユーロ圏のマクロ経済環境の違いが意識されやすいとみている。米国では物価上昇圧力が均してみれば減退しているものの、そのスピードは緩やかであり、労働市場も底堅く推移している。こうした中では、年内の利下げ観測が一段と後退する可能性が高く、多くの通貨に対してドルが買われやすい環境にある。一方で、ユーロ圏経済は、米国に比べ、景気の勢いは弱いといえる。ECBは6月に最初の利下げに踏み切るとみられるが、景気に勢いが無い以上、連続的な利下げ実施が次第に市場では意識され始めるだろう。そうした状況において、ユーロは軟調な推移を余儀なくされるだろう。今週の主な経済指標としては、22日(月)にユーロ圏4月消費者信頼感(速報)、23日(火)ユーロ圏4月製造業/非製造業PMI(速報)、24日(水)に独4月IFO企業景況感指数などの公表が予定されている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(4/15~4/19)の値動き: (対ドル) 安値 1.0601 高値 1.0690 終値 1.0657
(対円) 安値 162.75 高値 165.02 終値 164.81



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.2300 ~ 1.2700 189.00 ~ 194.00 円

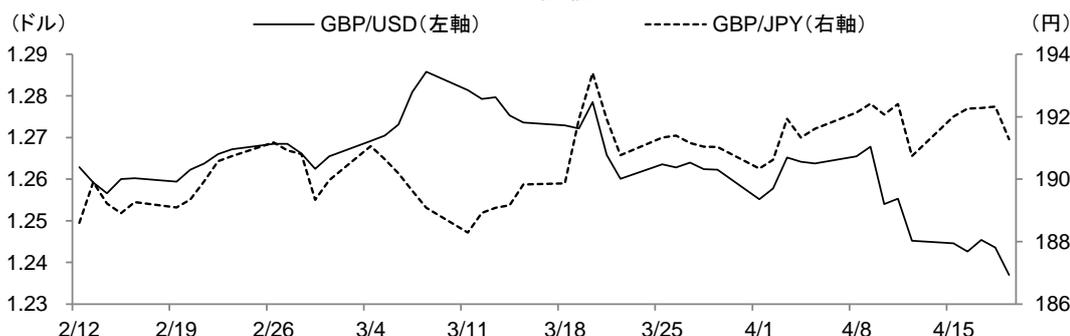
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は対ドルで約▲0.7%の続落となった。底堅い米経済指標を背景に、市場の米利下げ期待が後退していることや、イランとイスラエルの緊張感の高まりとグローバルなリスクセンチメントの悪化に伴う安全資産への需要が、ドルを押し上げている。こうしたグローバルなドル買いの流れに加えて、16日に発表された英国の労働市場関連指標が労働需給の逼迫や賃金上昇圧力の緩和を示唆する内容だったことやBOEのベイリー総裁のハト派なコメントも、ポンド相場の重しとなった。16日に発表された英国の失業率は予想外に上昇、2024年2月までの3か月間の失業率は4.2%と1月までの3か月の3.9%から上昇。新型コロナによるロックダウンから脱しつつあった2020年以降で最大の上昇だった。一方、週平均賃金(賞与を除く)は2024年2月までの3か月間で前年比+6.0%と1月までの3か月の同+6.1%から低下した。市場予想の同+5.8%は上回っているほか、過去の平均と比較して高水準であることには変わりがないものの、2023年夏ごろには前年比+8%近い伸びとなっていたことと比較して賃金の伸びは低下傾向にある。ベイリー総裁は16日、国際通貨基金(IMF)とのインタビューの中で、「インフレのダイナミクスは、英米両国経済におけるインフレのダイナミクスは乖離しつつあり、英国が米国より先に利下げを行い得る可能性を示唆した。

今週1週間のポンド相場は、やや反発か。イラン-イスラエル情勢が報復の連鎖に陥らなければ、ドルの上昇が和らぐ可能性があるだろう。とはいえ、先週のベイリー総裁の発言にあったように、英国が米国より先に利下げを行う可能性が意識されるなかでは、金利面から見てポンドは対ドルで上値を押しえられそう。今週はBOEのハスケル委員やピル・チーフエコノミストの講演が予定されており、BOEの利下げ開始のタイミングや条件に関する示唆が示されるかを見極めたい。対ユーロでは、ユーロ圏と英国の4月PMI(速報)が焦点となる。対円では、25日(木)~26日(金)に日銀金融政策決定会合が控えるが、大きなサプライズは無いという見方が多い。短期的には引き続き日本や韓国、インドなどアジア諸国による為替介入の可能性が引き続き焦点となろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(4/15~4/19)の値動き: (対ドル) 安値 1.2367 高値 1.2498 終値 1.2370
(対円) 安値 190.31 高値 192.84 終値 191.28



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

(1) 今週の予想レンジ: 0.6370 ~ 0.6520 98.90 ~ 100.40 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは0.64台後半から0.63台半ばまで大きく下落後、再び0.64台を回復した。15日、豪ドルは序盤は小幅買い戻される動きがあり、0.6493まで上昇。その後NY時間に発表された米3月小売売上高が予想を上回り、前月も上方修正されたことから米債売り・ドル買いの反応に。更に、イスラエル国防相がイランに対して報復しか選択肢はないと米国に伝えたとの報道が流れるとリスクオフの流れが強まり、豪ドルは一時0.6438まで下落した。16日、序盤は0.6440レベルにあるサポートラインをトライする値動きが続いたが、一旦下抜けると0.6409まで下落。中国1~3月期GDPが予想を上回る伸びとなったが豪ドルの買い材料とはならなかった。NY時間に開かれた討論会でパウエルFRB議長が利下げを急がない姿勢を示唆したことで、米短期金利が急上昇し、米2年金利は一時5%を記録。ドルが買いで反応する中、豪ドルは一瞬0.6390まで急落したが、すぐに買い戻され0.6400近辺で引けた。17日、終日かけてじりじりと買い戻される展開となった。NZ1~3月期消費者物価指数(CPI)は事前予想通りの結果ではあったものの、前期比+0.6%と前回の+0.5%から加速する結果となり、NZドルは買いで反応。豪ドルも連れ高となった。その後、欧米時間にかけて米金利が低下する中、豪ドルは買い戻しの流れが継続し0.6445まで上昇。この日発表されたバージョンブックで「インフレ低下の進展の停滞が懸念されている」との内容が示されたことを受けて米金利が上昇すると、豪ドルは小幅売り戻されて0.6435で引けた。18日、序盤は小高く推移。この日発表された豪3月雇用統計では雇用者数が予想外に減少し、失業率は前月から小幅上昇した。この発表を受けて豪ドルは一旦0.6417まで下落したがすぐに買い戻され、その後は0.6456まで上昇した。NY時間に入り、米新規失業保険申請件数と継続受給者が共に予想を下回ったことからドルが買いで反応。更にウィリアムズNY連銀総裁が今後利上げの可能性も否定できないとの発言をしたことを受けて一段とドル買いが強まり、豪ドルは0.6417まで下落した。19日、イスラエルによるイラン攻撃の報道が流れるとリスク回避の流れから年初来安値を更新し、一時0.6363まで下落。但しすぐに買い戻しの動きが入り、一日を通して下に往って来いとなった。結局0.6420近辺まで上昇して越週した。

今週の豪ドルは、底堅い値動きを予想する。今週は24日(水)豪1~3月期CPI、25日(木)米1~3月期GDP(速報)などが発表される。今月に入り米経済がなおも底堅い状況を示す結果が続けて発表される中、パウエル議長を含む複数のFRB高官からタカ派的な発言が増え、米国の年内利下げ見通しが後退している。市場が織り込む米利下げ見通しは現時点で、11月まで1回織り込んでいる状況。今週は豪1~3月期CPIが発表されるが、豪州でもインフレ低下速度の減速が示されれば、豪ドルに一旦買いが入る可能性があるとする。先週金曜日に見られた地政学的リスクの高まりも一旦収束し、今週はリスクオフの反動も豪ドルを支えよう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(4/15~4/19)の値動き: (対ドル) 安値 0.6363 高値 0.6493 終値 0.6419
(対円) 安値 97.78 高値 100.02 終値 99.25



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。